



琉球大学学術リポジトリ

University of the Ryukyus Repository

Title	小学校特殊学級における交流教育の取り組み
Author(s)	巖, 隆志; 緒方, 茂樹
Citation	琉球大学教育学部障害児教育実践センター紀要 = The bulletin of the Research and Clinical Center for Handicapped Children(5): 99-109
Issue Date	2003-05-01
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/5098
Rights	

「小学校特殊学級における交流教育の取り組み」

巖 隆志* 緒方 茂樹**

Educational Cooperation between Special and Normal Classes in Elementary School

Takashi IWAO* Shigeki OGATA**

今日、特殊学級で学ぶ子どもたちの、自立や社会参加の基礎となる「豊かに生きる力」をどのように育てていくかが求められている。交流教育は、特殊学級での活動では実現が難しい大集団での協同的な活動の経験によって、社会性や豊かな人間性を育むことができ、一方、通常の学級の児童にとっては、障害のある児童に対する理解を深め、同じ社会を生きる人間としての「共生」の気持ちを育てることができる。本報告では、今年度の生活単元学習「あげつちまつり」の取り組みについて、通常の学級と特殊学級双方の教科（生活科・生活単元学習・総合的な学習）の指導計画作成から、実施にいたるまでの経過について具体的に述べた。交流教育を進める上で、指導者はその意義をよく理解し、指導に当たる上で同じ視点からの児童理解に努め、相互の関わりを観察して活動を進めていかなければならない。今回の取り組みを通じて、単元の作成当初から「めざす児童像」を明確にしておくことがとりわけ重要であることが改めて明らかとなった。さらに低学年段階での交流学习は、相互の関係がある程度対等になるような教材の準備が必要であり、お互いのよさを認め合う場の設定が重要である。今回の取り組みにおいても、手先の器用な特殊学級の子どもたちの作品を見た通常の学級の子どもが、作り方を一生懸命聞いている場面が見られた。今回行った取り組みによって、子どもたちが共に助け合い、支え合って生きていこうとする「共生」の気持ちを育てることができ、相互に教育的効果のある学習活動を展開することができたと考える。

Key words: 交流学习、共生、特殊学級、生活単元学習、総合的な学習

I. はじめに

交流教育は、特殊学級の児童にとっては、特殊学級での活動では実現が難しい大集団での協同的な活動の経験によって、社会性や豊かな人間性を育むことができ、一方、通常の学級の児童にとっては、障害のある児童に対する理解を深め、同じ社会を生きる人間として、共に助け合い、支え合って生きていこうとする「共生」の気持ちを育てる

ことができることから、相互に教育的効果のある学習活動を展開することができると思う。今日、特殊学級で学ぶ子どもたちの、自立や社会参加の基礎となる「豊かに生きる力」をどのように育てていくかが求められている。特殊学級の子どもたちにとって、学校という自分を取り巻く身近な社会の中で、たくさんの人たちと関わり合いを持つことは、人間相互の関係や集団参加などの社会生活に必要なスキルを身につけるよい機会である。

本校では、平成12年度より交流学习の形態を再考し、それまでの通常の学級の学習活動に担任が付き添う形で児童と一緒に参加することや、児童が単独で参加する交流学习のみにとどまらず、特

*Taira Daiichi Ele. School, Iwaki City,
Fukushima Pref.

**Faculty of Education, Uni. of the Ryukyus

特殊学級の担任はT・Tの一人であり、児童も通常の学級の児童と一緒に構成する集団の一員として、共に活動する形態の交流学习を実施してきた。実施にあたっては、その中に保護者や地域の人たちに入ってもらふことにより、子供たちの活動が拡がり、安全面にも留意できるように配慮して行っている。昨年度からは、低学年ブロックと特殊学級の生活科・生活単元の交流の時間を設定し、年間を通じ定期的に交流を図ってきた。今年度より、計画段階から教育課程に位置づけ、さらに組織的・計画的に実施している。本報告は、今年度の生活単元学習「あげつちまつり」の取り組みである。ここでは通常の学級と特殊学級双方の教科（生活科・生活単元学習・総合的な学習）の指導計画作成から、実施にいたるまでの経過について、単元計画や児童の実態やめあてについて具体的に述べていく。また、最後に交流学习のあり方や今後の課題について考察をする。

II. 本校の交流学习の実際

1 特殊学級、低学年ブロックの実態

本校は、児童数520名、学級数21の比較的規模の大きい小学校である。学区内には、JRいわき駅や市役所、裁判所、美術館などの官公庁や商店街、繁華街が控える、市の中心部に位置している。低学年の通常学級は、1・2年生ともに3クラスある。

特殊学級「あげつち学級」は、4学級21名の児童（知的3学級18名、情緒1学級3名）が在籍している。この6年間で児童数は、約3倍に増え、現在、福島県内では、最大規模の特殊学級である。児童の障害の種類・程度は、多岐にわたっており、発達段階も様々であるため、教育課程の編成に当たっては、個別の課題に即した個に応じた指導を中心としながら、行事や体育・音楽では特殊学級での集団での活動も取り入れて年間指導計画を作成し、教育活動を進めている。

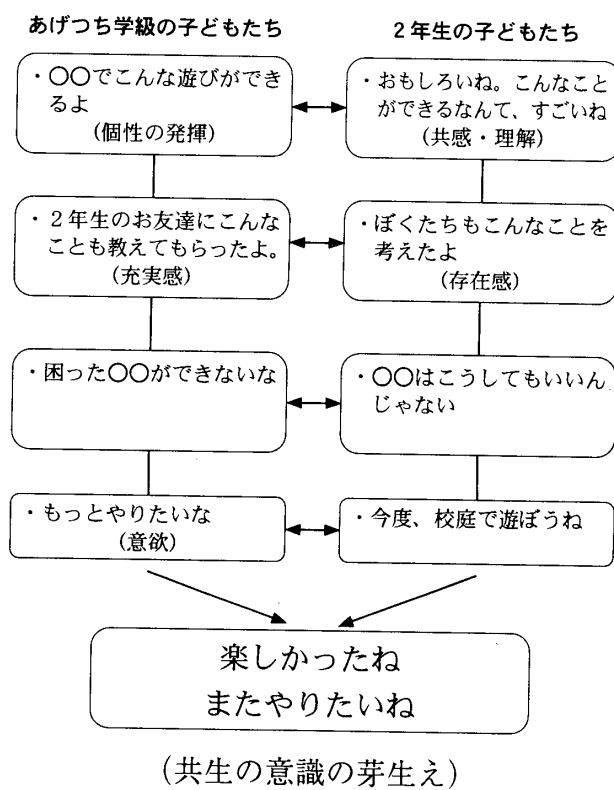
2 特殊学級と低学年ブロックの交流

通常の学級との交流は、全学年にわたって行われているが、教科や行事、清掃や給食など児童一人ひとりの発達段階に応じて、交流を図っている。

低学年段階の交流学习は、体育・音楽・図工などの教科、学校行事、日常的な給食や集会活動に題材・内容を考慮したうえで、ほぼ全員参加している。さらに、1・2年生の生活科と特殊学級の生活単元学習の内容を洗い出し、活動内容がほぼ同じものについては、同時期に協同で計画・実施している。

3 生活単元学習「あげつちまつり」

(1) 本単元でめざす児童の姿



付随してくるもの・・・個性、持ち味を生かす場の設定
根底にあるもの・・・人権問題

* 3年生以上の子ども・・・この次は△△をしたいな。

図1. 本単元で目指す児童の姿

本単元を作成するにあたり、学習活動の中で特殊学級と通常の学級の児童双方に身につけてほしいことや、望ましいやりとりを教師間で共通理解を図る必要があった。それらを図式化したものを図1に示す。あげつち学級と2年生の子どもたちとの間で、題材を通してお互いが「個性を発揮」し、「共感・理解」が得られるようなきっかけを作り、さらにお互いの考えを伝え合うことで「充実感」や「存在感」をもてるような流れを考えた。

その後も状況に応じたやりとりを継続しながら、最終的には「楽しかった」、「またやりたい」といった達成感をもてることが重要であると考えた。一連の学習活動の中で特殊学級と通常の学級の児童が互いに影響しあい、さらにひとつの達成感を共有できれば、それがすなわち「共生の意識の芽生え」につながると考えられる。ここで重要なことは児童のもつ個性や持ち味を生かせる場の設定をいかに行うかということであろう。

(2) 単元について

本単元は、昨年度までの生活単元学習「なつの遊び」をふまえて設定した大単元「なつだいすき」の中に含まれる小単元「なつがやってきた」「あげつちまつり」「なつを食べよう」の中の「あげつちまつり」である。「なつだいすき」は、子供たちが実際に「夏」を肌で感じ、活動がより現実感を伴った取り組みに生かされ、日常生活にフィードバックすることができるように、夏休みを挟んで7月から9月までの「夏」の3ヶ月間を期間としてあてることとした。小単元「なつがやってきた」では、伝統行事の七夕を中心とした内容の活動を展開すると同時に、「夏」の到来を知り、「あげつちまつり」では、夏ならではの季節感ある遊びを夏祭りの中で、通常の学級の子供たちとの交流を通して展開し、「なつを食べよう」では、春に畑やプランターに植えて世話をしてきた野菜を収穫・調理して文字通り「夏」を体で味わう活動を設定した。季節を軸とした単元であるが、総時数37時間を使って、教科的な内容はもとより、調理やダンス、栽培など多くの学習内容を含んだものも取り入れ、同時期の各教科・領域と関連させながら、児童の実際の生活に即し、心身の発達状態において個人差が大きい集団にも適合するものとなるように配慮して単元計画を立案した。さらに、学級独自や学級間交流、生活科の交流学习で行ってきた「まちたんけん」「買い物」や造形・体験活動等の既習事項を生かし、自分なりの課題を持ち、意欲が持続できるように内容を構成した。

また、生活単元学習をベースに進めながらも一部総合的な学習の時間を取り入れる試みを行った。中・高学年の児童においては、学習活動で身につけた実際の生活に結びつく知識・技能が少しでも

実際の生活に生かすことができ、「〇〇してみよう」という意欲をもち、それに向けて活動することができたならば、総合的な学習の時間のねらいが達成されると考える。

生活単元学習の単元計画や活動内容の取り扱いについては、実態に応じて弾力的、柔軟に対応していく予定である。特に今年度より入学した1年生については、入学時より積極的に1学年との交流を図り、2学年以上の子供たち同様に交流学习を日常的なものとして活動に参加できるように配慮した。また、授業においてはT・Tを生かすために、指導計画を立てる段階から支援にあたる教師間で共通理解を図り、個々のよさを引き出し生かす支援や役割を明確にするよう努めた。

(3) 単元計画

単元の計画については、あげつち学級と2年生各々の単元計画をひとつの図上にまとめたものが資料1である。まず、それぞれの学級毎に子どもの思いと教師の願いを明らかにした(上段)。次に単元の流れをおおまかな流れの中で示した(下段)。ここで交流学习の部分は、1) 友だちとの顔合わせ、2) 材料集め、3) 自分の好きな国で遊ぼう(本時)となっている。あげつち学級の児童は、それぞれに応じて「つりのくに」、「もぐらのくに」、「まとあてのくに」など、6種のくに(グループ)に分かれて授業に参加できるようになっている。2年生の場合、本時の後に「2年生でつくってみよう」、「もっとくふうしてみよう」という独自の流れが続いている。最終的にはまとめの時間を設けて、あげつちで学級では「絵や日記であらわそう」、2年生では「お手紙をかこう」という内容が組まれている。

(4) 本時の実際

1) ねらい

【あげつち】

- ・あげつちまつりに一人ひとりの持つ手段で友だちと関わりながら、楽しさを味わうことができる。
- ・ダンスやそれぞれの担当するコーナーでの役割の中で十分に力を発揮することができる。

〔2年生〕

- ・あげつち学級の児童と相互に関わることで、一人ひとりの個性に気づくことができる。
- ・グループごとの遊びを通して、身近にある素材のよさや自然のすばらしさを感じることができる。

2) 児童の実態と個別のねらい

交流教育を進める上で、指導者はその意義をよく理解し、指導に当たる上で同じ視点からの児童理解に努め、相互の関わりを観察して、活動を進めていかなければならない。特に本単元のように、グループに分かれた活動を含む大規模な関わりに

なると、担任をしていない子どもたちについてよく理解していないと、実際に授業を進めていくのは非常に困難である。あげつち学級は、4学級21名の児童が在籍していることから、障害の特徴についても様々である。あらかじめ交流を行う学級の教師が個々の児童の実態と個別のねらいを明確に把握しておくことはきわめて重要であると考えた。これらのことから、単元の作成当初の段階に「めざす児童像」をまず明確にし、教師がお互いに共通理解をはかるよう努めた。表1～4に対象となるあげつち学級児童の実態と個別のねらいを示す。実際の学習活動に際しては、この「めざす

表1. 児童の実態と個別のねらい（1組：知的障害学級）

名前	実 態	活動内容	本 時 の ね ら い
1組 A男	1学年。ADHD。 初体験の活動や大勢の集団活動では情緒が不安定になったり、怖がったりすることがある。言葉の指示によって行動できるが、興奮してくると周りの友だちに乱暴に接することがある。興味を持った活動には集中して取り組むことができる。言葉でのコミュニケーションがとれる。	[つりのくに] 発砲スチロールの魚に色を塗ったり ヨーヨーつりの見本を見せる。	○大勢の人の中の活動に慣れて練習してきたダンスに参加する。 ○移動するときに2年生と一緒に移動できる。
B男	1学年。自閉的傾向 集団の中でも落ち着いて活動することができる。周りに合わせて行動する時は、声かけ等の援助が必要である。どの友だちとも抵抗無く活動できる。オウム返しが多く、自分から発する言葉は「やる」「いや」といった表現が多い。	[かざりづくり] 紙粘土、貝殻おはじきを使ってアクセサリーを作る見本を見せる。	○周りの動きに合わせて一緒にダンスを楽しむことができる。 ○友だちと一緒にいろいろなコーナーに遊びに行くことができる。
C男	1学年。ダウン症 集団の活動では萎縮してしまい、座り込んだり泣き出してしまうことが多い。友だち同士のやりとりは慣れないと難しく、教師を介しての活動が主である。ダンスや製作活動は好きな活動である。言葉による指示はある程度理解しているが行動になかなか移せない。言葉はまだ出ていない。	[つりのくに] 発砲スチロールの魚に色を塗ったり ヨーヨーつりの見本を見せる。	○周りの動きに合わせて一緒にダンスを楽しむことができる。 ○周りの友だちの動きを見ているいろいろなコーナーに遊びに行くことができる。
D女	1学年。ダウン症 気分のむらがあるが、興味のある活動では友だちと協力したり、教師に質問してきたりして自分でやろうとする姿が見られる。飽きっぽく集団から逸脱して他の場所へ行ってしまふことがある。言葉による指示を理解して行動に移せる。自分の要求も言葉で伝えることができる。	[かざりづくり] 紙粘土、貝殻おはじきを使ってアクセサリーを作る見本を見せる。	○大勢の人の中の活動に慣れて練習してきたダンスに教師と一緒に参加する。 ○移動するときに2年生と一緒に移動できる。

表2. 児童の実態と個別のねらい（2組：知的障害学級）

名前	実 態	活動内容	本 時 の ね ら い
2組 E男	2学年。軽度知的障害。 明るい性格で、人なつこい。情緒的に不安定な面があり、活動中他児に干渉されると激しく泣き、長時間おさまらないことがある。手先が起用で、工作に興味関心が非常に高く独創的な作品を作ることができる。基本的な生活習慣はほぼ確立しており、助詞の使い方に難はあるが日常会話に支障はない。	[はっぱのくに] はっぱをつかって 笹舟、お面などをつくり、遊び方を教える。	○葉っぱを使ってしょうずにおめんやささぶねを作ることができる。 ○けんかをせずに、最後まで仲よく友だちと活動することができる。
F男	2学年。軽度知的障害。 穏やかな性格で、誰からも好かれている。ダンスが好きで、曲に合わせてはりきって体を動かすことができる。どの活動にも興味を持って取り組むが、飽きやすく、活動の場から逸脱することがある。	[もぐらのくに] もぐらのうちをつくったり、自分かもぐらになってゲームに参加する。	○ダンスで体全体を使って大きく動作をすることができる。 ○もぐらたたきのルールを理解して、友だちと協力し合っ、最後まで活動に参加することができる。
G男	2学年。軽度知的障害。ADHD。 明るく人なつこい。言語の発達に遅れが見られ、コミュニケーションをとることが難しい面がある。多動で飽きやすく、活動中他児(特にE男)の邪魔をして喜ぶことが多い。ダンスが得意で、振り付けなどはすぐに覚えることができる。手先が器用で、作った作品で遊ぶことが大好きである。	[まとあてのくに] 新聞紙とわりばしでてっぽうを作ったり、的当てゲームをする。	○ダンスで、みんなの先頭に立って踊ることができる。 ○飽きずに最後まで自分のコーナーで活動することができる。
H男	2学年。軽度知的障害。ADHD。 4月に他校の通常学級から転入してきた。日常会話に全く支障はない。何にでも積極的に取り組む反面、一旦自信を失うと、依存心が強くなり、自分の殻に閉じこもってしまい、指示があっても何もしなくなる面がある。人との関わり方がともすると乱暴になったり、荒い口調になってしまう面がある。運動神経がよく、機敏である。	[もぐらのくに] もぐらのうちをつくったり、自分かもぐらになってゲームに参加する。	○ダンスで元気に踊ることができる。 ○誰にでもやさしく接し、最後まで主体的に活動に参加することができる。
I女	2学年。軽度知的障害。ダウン症候群。 基本的な生活習慣は身につけており、言葉ははっきりしないが、日常会話が成立する。クラスのほかの子に対して時々乱暴な言動が見られる。手先は不器用であるが、活動には非常に意欲的に参加する。	[かざりづくり] 紙粘土、貝殻おはじきを使ってアクセサリーを作る見本を見せる。	○ダンスで体全体を使って大きく動作をすることができる。 ○2年生の友だちと協力し合っ、かざりを作ることができる。
J女	2学年。軽度知的障害。ダウン症候群。 基本的な生活習慣は身に付いている。頑固な面があり、時々自分の意に沿わないと、話をしなくなり、動かなくなることもある。手先は不器用であるが、活動には意欲的に取り組む。	[まとあてのくに] 新聞紙とわりばしでてっぽうを作ったり、的当てゲームをする。	○ダンスで体全体を使って大きく動作をすることができる。 ○友だちと仲よく、最後まで活動に参加することができる。
K男	3学年。自閉症。中度知的障害。 表出言語は見られないが、内言語は豊富で、教師の指示などは理解して行動する。手先は器用であるが、学習活動には興味を示すことが少なく、一人遊びをしていることが多い。粘土に触るのが好きで独創的な作品を作ることができるが、作品に執着心がなく、すぐに壊してしまう。大人数の集団が苦手な、過度に人に関わろうとされると逃げ出したりパニックを起こすことがある。	[かざりづくり] 紙粘土、貝殻おはじきを使ってアクセサリーを作る見本を見せる。	○教師と一緒にダンスをすることができる。 ○自分のコーナーから離れずに活動に参加することができる。
L男	3学年。軽度知的障害。 非常に活発で多動。1年生まで通常の学級に在籍。集中力が持続せず、離席が多い。異学年集団の中では、年下の子の面倒を見てあげるやさしい面を持っている。どの活動にも自分が中心になって取り組もうとする積極的な姿勢が見られる。	[まとあてのくに] 新聞紙とわりばしでてっぽうを作ったり、的当てゲームをする。	○恥ずかしがらずに友だちと一緒に元気にダンスをすることができる。 ○まとあてゲームの方法やてっぽうの作り方を友だちにやさしく教えてあげることができる。

表3. 児童の実態と個別のねらい（3組：知的障害学級）

名前	実 態	活動内容	本 時 の ね ら い
3組 M女	3学年。知的障害 経験不足により全体的な発達が遅れている。 言葉でのコミュニケーションが成立するが聞か れていることが理解できないことが多い。 自分に自信がもてないためすべての面で消極 的で友だちとの関わりがぎこちない。	[はっぱのくに] はっぱを使ったお 面の作り方を実演 してみせる。	○大きな動作でダンスに参加す ることができる。 ○途中であきらめることなく、 あげつちまつりに参加して楽 しく遊ぶことができる。
N女	4年。ダウン症 言語に不明瞭な部分はあるが、何事にも積 極的に取り組むことができる。 同学年と音楽・体育の授業で交流している。 だれとでも楽しく遊ぶことができる。	[くじのくに] 自分で作ったくじ の遊び方を説明す る。	○くじの遊び方を説明すること ができる。 ○グループの友だちと一緒にい ろいろなコーナーで楽しく 遊ぶことができる。
O女	5年。知的障害 集団の中にはいれるが、自分から積極的に 関わりをもつまでには達していない。何事も 理解するには時間がかかるが、ていねいに取 り組むことができる。	[はっぱのくに] はっぱを使ったお 面の作り方を説明 する。	○はっぱをつかっておめんやさ さぶねを作ることができる。 ○グループの友だちと関わりな がら、コーナーを回って遊ん だり作ったりすることができる。
P女	5年。知的障害 場の状況判断ができない。活動の切り替え も難しく他者との関わる手段がみについてい ない。自分の興味のあることには集中するこ とができる。	[かざりのくに] 紙粘土で作ったか ざりの見本を見せ る。	○貝がらや紙粘土を使って楽し みながら作品を作ることがで きる。 ○グループの友だちと一緒にい ろいろなコーナーで遊ぶこと ができる。
Q女	5年。ADHD 集中して活動を継続することが難しく、興 味、関心が次々と移っていく。 下学年の子をやさしく面倒をみてあげるこ とができ、どんな人とも積極的に関わろうと する。	[もぐらのくに] もぐらたたきの遊 び方を説明するこ とができる。	○説明を最後まで聞いてから、 活動を始めることができる。 ○思い通りにならない時もあき らめずに友だちと仲よくゲー ムをしたり遊んだりすること ができる。
R男	6年。自閉症 言葉で周りとのコミュニケーションをとるこ とは難しい。興味のもてる活動は限られてい る。言葉による指示は理解でき、行動に移す ことができる。	[くじのくに] くじの遊び方を実 演してみせる。	○教師と一緒にダンスの動作を することができる。 ○グループのともだちといっしょ に最後まであげつちまつりに 参加することができる。

表4. 児童の実態と個別のねらい（4組：情緒障害学級）

名前	実 態	活動内容	本 時 の ね ら い
4組 S男	2年。ADHD 興味、関心のもてる領域に偏りがあり、興 味のもてない活動には参加することができな い場面があり、耳ふさぎをしたり、狭い場所 にかくれたりする。2年生と音楽・体育に進 んで参加し楽しく活動している。	[はっぱのくに] はっぱをつかった 笹舟、お面の作り 方を友だちに教え て遊ぶ。	○友だちと一緒に作ったり、遊 んだりしておまつりを楽しむ ことができる。 ○2年生と一緒にひとつのコー ナーだけでなく多くの場で楽 しく作ったり遊んだりできる。
T男	4年。LD 今年の春に他校の通常学級から転入。 大人とは積極的に関わりをもとうとするが、 児童間とはまだ自分からは十分にもてない。 周りの状況、相手の気持ちをくみ取れないた めトラブルが多い。不器用であるが 作品づ くりを楽しむことができる。	[くじのくに] いろいろな種類の くじのひきかたを 教え、いっしょに 遊ぶ。	○おまつりの活動に最後まで参 加し、楽しむことができる。 ○おまつりの約束を常に目で確 認し、友だちと仲良く活動で きるようにする。
U女	5年。自閉症 環境の変化に敏感に反応し、場の移動や予 定の突然の変更には適応できない。自分の興 味ある活動でも友だちと活動を共有化するこ とは難しい。 下級生との関わりを好み、自分からかかわり をもとうとする。	[つりのくに] つるものを作りつ り方を教え、いっ しょに遊ぶ。	○おまつりの活動を友だちと一 緒に楽しむことができる。 ○ひとつの活動だけでなく多く の活動にも参加し楽しむこと ができる。

児童像」を常に念頭に置きながら児童に対応するよう確認した。

3) 学習の展開

学習の具体的な展開について、先の単元計画と同様に、あげつち学級と2年生各々の学習内容・活動をひとつの図上にまとめたものが資料2である。図中◇◆は教師の支援を、また○●は評価に関する内容を記述しており、各々白抜きがあげつち学級、黒塗りが2年生を示している。また、吹き出しは予想される児童の反応を示している。一般的な指導案では学習内容・活動を時間の経過に沿った表形式で表すことが多い。しかし図2のように全体の流れを図式化しておくことで、授業の流れはもちろん、予想される児童の反応や教師が対応すべき留意点などを直感的に把握できるメリットがある。

4) 評価

- ・個々のねらいは達成されたか
- ・教師の支援は適切であったか

Ⅲ. おわりに

交流教育を進める上で、指導者はその意義をよく理解し、指導に当たる上で同じ視点からの児童理解に努め、相互の関わりを観察して、活動を進めていかなければならない。特に本単元のように、グループに分かれた活動を含む大規模な関わりになると、担任をしていない子どもたちについてよく理解していないと、進めていくのは非常に困難である。その意味で、単元の作成当初から「めざす児童像」を明確にしたことは非常に効果的であった。

この授業の参観者から「どの子が特殊学級の子どもかわからなかった」という声が多く聞かれた。低学年段階での交流学習は、相互の関係がある程度対等になるような教材の準備が必要である。本時でも、手先の器用な特殊学級の子どもの作品を見た通常の学級の子どもが、作り方を一生懸命聞いている場面が見られた。お互いのよさを認め合う場の設定が上記のような感想となったものと考えられる。このような児童の様子は、本時で目指

す児童の姿について述べた「個性の発揮」と「共感・理解」の部分に相当すると考えられる。この単元の大きなひとつの目的でもある「共生」の意識が、あげつち学級と2年生の児童の中に芽生えたひとつのエピソードであったと考えられる。今後は、さらに教科の特質を踏まえた上でお互いの児童と一緒にできることを探り、日常的な場面での交流に生かすように模索していきたい。

また、交流活動の対象を広げる試みについては学校にとどまらず、可能な限り地域に求めることが必要であると考え、今年度は市内の大学生を地域の講師として学校に招き一緒に活動する機会も設けている。また一昨年から始めた地域の特殊学級の合同学習については、これまでにきわめて大きな教育効果をあげている。これは平地区に設置されている特殊学級の児童と担当教師、さらに保護者まで参加を呼びかけて行うもので、管理職の協力の下、これまでに市バスなどを利用して校外に出かける活動や、合同のクリスマス会の開催などを行ってきている。この取り組みは特に在籍児童数が少ない特殊学級にとって、集団参加という意味できわめて効果があり、さらに保護者との連携を深めるという意味からも有意義なものであった。さらに、総合的な学習が教育課程に位置づけられるようになり¹⁾、この総合的な学習の時間と領域・教科を合わせた指導とのねらいの違いを十分に踏まえて指導計画を作成し、活動を展開することが望まれている。地域の特殊学級との合同学習は、子どもたちの発達段階に応じた内容のものを選択して展開し、単元の終了時点で完結しないところから、従来の領域・教科を合わせた指導とは一線を画すものがあり、総合的な学習の特質を持ち合わせていると考えている。

本報告でも述べたように、障害児にとって健常児との交流活動はその両者に意義のあることであるが、特に特殊学級在籍児童の障害特性が多様化・重度化することによって、児童によっては特殊学級と通常の学級との交流学習だけでは集団に対する適応という点で、自ら問題を解決する主体的な活動が制約される面も少なくない。今回報告したような低学年の取り組みでは、生活科や集会行事など交流学習が成立する活動を考えることは比較的容易である。しかし、学年が上がり発達段階の

差異が広まるにつれ、交流学習が成立する教科が減少し、交流を通じた特殊学級在籍児童の主体的な活動よりも、周囲の児童からの支援が中心となった活動の割合がどうしても多くなる傾向がある。その一方で、集団の中での主体的な活動の経験は、発達年齢が上がり自立の日が近づくにつれて「生きる力」を身につけるといふ点で必要度が増してくるといふジレンマがある。この点については、例えば先の合同学習の範囲を、地域の小学校のみならず中学校の特殊学級まで広げるなどの方策をとりながら現在も具体的な方法論を探っている。

以上述べてきたことから、特殊学級で学ぶ子どもたちの自立や社会参加の基礎となる「豊かに生

きる力」は、学校の側、特殊学級の側から活動の場所を求め、情報を発信することで身につける機会を増やすことができると考えられる。特に交流教育については、今後とも「共生」という考え方を念頭に置きながら教育活動の継続を図り、活動の場を拡大していきたいと考える。

文 献

1. 文部省：盲学校、聾学校及び養護学校 幼稚部教育要領案 小学部・中学部学習指導要領案 高等部学習指導要領案：1999.

資料1 単元計画

(1) 本単元における子どもの思いと教師の願い

あげつち学級

2年生

〔子どもの思い〕

〔教師の願い〕

〔子どもの思い〕

〔教師の願い〕

- 夏は楽しいことがたくさんあるね。
- 友だちをたくさん増やしたいな。
- 大変だけど、楽しいことが待っているから、最後までがんばるぞ。

- 夏の季節のよさを体で十分味わってほしい。
- たくさんの友だちとの関わりを楽しんでほしい。
- 多少の失敗は気にせず、課題に挑戦してほしい。

- あげつち学級の人たちと友だちになりたいな。
- やさしく声をかけたりできるといいな。
- あげつち学級の友だちにダンスを教えてください。
- 自分たちの計画通りにがんばって活動したいな。

- 思いやりの心が育ってほしい。
- あげつち学級の異学年の友だちとも積極的に交流してほしい。
- 友だちのよいところを見つけ、認めてほしい。
- 最後までがんばってほしい。

(2) 単元の流れ〔総時数 あげつち学級 15/37 2年 9/28〕

*網掛け部分は交流学习

〔あげつち学級〕

〔2年生〕

あげつちまつりをしよう

- 計画を立てよう ①
- 班づくり ①
- ダンスの練習 ①

- 計画を立てよう ①
- 班づくり

○ 2年生の友だちと顔合わせ ①

● あげつち学級の友だちと顔合わせ ①

なにか持とうよ
そうだ、ダンスで。

つくろう ②

← マラカスだ →

→

つくろう ① かつこよくかざろう ①

○ 材料あつめ ②

● 材料あつめ ②

○ おまつりの準備 ⑤

いっしょにつくろう

本時 ②

つりのくに	もぐらのくに	まとあてのくに	かざりのくに	くじのくに	はっばのくに
・魚 ・つりざお ・ヨーヨー	・もぐらのおうち	・新聞紙でつぼう ・玉 ・まと	・アクセサリー	・くじ紙 ・景品	・おめん ・ささぶね

2ねんせいでつくってみよう

わなげ	パピニコ	貝がら	化石	おばけ	くじ
・まと ・支	・パチンコ ・玉 ・まと	・えんぴ つたて ・カスタ ネット	・葉っぱ や貝を使 って	・おもしろ いおばけ ・こわいお ばけ	・くじ ・けいひん

もっとくふうしてみよう

いっしょにあそぼう

- まとめ
絵や日記であらわそう ①

- まとめ
お手紙をかこう ①

